慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バルザックの読者プルーストと偶像崇拝
Sub Title	Proust lecteur de Balzac et l'idolâtrie
Author	大嶌, 健太郎(Oshima, Kentaro)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.21, (2016.) ,p.50- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20161201-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルザックの読者プルーストと偶像崇拝

大嶌健太郎

序

プルーストとバルザックというテーマは、他の作家との比較の中で論じられることが珍しくないプルースト研究においても、もっとも頻繁に扱われてきたテーマと言える。特に最近では、アニック・ブイヤゲの著書『プルースト：フロベールとバルザックの読者』がその代表であるように、間テクスト性を中心に据えたアプローチが盛んにおこなわれており、バルザックの小説群をプルーストがいかに読み込み、またそれを消化し、『失われた時を求めて』の中で再利用していったのかを問う研究が注目されている[1]。しかし、このようなアプローチはバルザックの読者としてのプルーストの姿を明らかにしてくれるとはいえ、作家としてのプルーストが自身の小説の中で利用できる材料としてバルザックをどう読んだのかという問題に限定される。本稿は、バルザックとプルーストの関係をより広い視野から捉えなおすべく、「書くための読書」としてではなく、「読むための読書」としてバルザックはいかにして読まれていたのか、つまり、作家としてのプルーストではなく、一人の「人間喜劇」愛読者としてのプルーストについて論じてゆきたい。そのために今回は、『サント＝ブーヴに反駁する』に収められた「サント＝ブーヴとバルザック」を考察対象とする。このバルザック論は、他のボードレール論やネルヴァル論、フロベール論などと異なり、作家の「真の自我」に迫るというプルースト的文学批評の目的からは大きく逸脱し、プルーストがバルザックに対して示す個人的な嗜好、彼がこの文豪に対してのみ実践している特殊な読書法を展開するものとなっている。その意味で、「サント＝ブーヴ

[1] Annick Bouillaguet, *Proust lecteur de Balzac et de Flaubert L'immitation cryptée*, Honoré champion, 2000.

とバルザック」を読み直すことは、プルーストのバルザックへの偏愛はどのようにして生まれたのか、一読者としての彼がバルザック的小説世界に見出した魅力とは何なのか究明することになるとともに、「プルーストのバルザック論」としては片づけがたいこの論考そのものの意義を改めて問うてゆくことになろう。

1　ロマネスクから歴史へ

プルーストがバルザックを愛読していたという事実を示す証拠は、彼が作家としてのキャリアを開始して一連のサント＝ブーヴ批判や模索によって19世紀近代小説の祖を深く論じるよりはるか以前に書かれた個人的な文通の中にも多く存在している。1890年6月に母ジャンヌへ宛てられたある書簡を読むならば、バルザックがプルースト親子共通の愛読書であったことが読み取れる。幼少期のプルーストの、小説を読むことへの情熱は、バルザックのみならず、もちろん他の多くの作品にも傾けられていた。8歳で、ミュッセ、ヴェルヌ、9歳でスチーブンソン、高等中学へ入学し文法級クラスへ入学する時分には特にゴーチエの『キャピテーヌ・フラカス』を愛読していた。さらに15歳を過ぎれば、後に師と仰ぎ、私淑したアナトール・フランスに傾倒したかと思えば、オーギュスタン・チエリの歴史小説を読みふけり、1886年を自ら「チエリの年」と銘打ったほどである[2]。以上のような豊富な読書体験は当然ながら、幼少期の作家の精神生活にとって忘れられない記憶となり、後の彼自身の小説作品にとって重要なモチーフとなってゆくだろう。その一つの例を『失われた時を求めて』第一巻における、コンブレーの庭の読書場面に見出すことはたやすいが、そこではベルゴットの作品を論じる過程で作家独自の小説美学の一端が読書体験の記述の中に織り交ぜられてしまっており、幼少時代の読書体験にのみ焦点が絞られているのはむしろ、『ジャン・サントゥイユ』や、「読書について」などの初期作品の中においてであろう。これらの場面に共通するのは、主人公が小説のロマネスクなるものに惹かれ、作中人物と同化し、彼らの架空の人生を共に生きることによって、ある種の

[2] Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust Biographie*,Gallimard, 1996, pp. 75-77.

現実逃避をすること、さらには、作品を読み終え現実へ戻った時に襲ってくる虚無感や、作品世界の儚さに対する幻滅が描かれていることである。『ジャン・サントゥイユ』では、『キャピテーヌ・フラカス』の冒険譚に没頭していたジャンであったが、本を閉じた後は、そのロマネスクな世界が所詮は作り話に過ぎず、無味乾燥なものに思えてくる一方で、作者ゴーチエが散りばめた、プロットとは関係のない考察や、古めかしい独特な言い回しなどの魅力は永続するようだと語られる。「読書について」においても同様で、語り手は、現実の人間に対してよりも愛情を注いできた作中人物の人生が、本を読み終えるやいなや、およそ現実とは何ら関係を持たない夢の世界での出来事に過ぎなかったことに幻滅を覚える。

要するに、小説に対するプルーストの懐疑は、作品世界が現実的な実態や意味を持たないこと、つまりは、現実とロマネスクなものとの乖離に由来していると考えられる。ところで、本稿のテーマであるバルザックに話を戻すならば、現実とロマネスクなるものとの非連続性を克服したいという欲求こそ、プルーストのバルザックに対する関心の根底にあるのではないだろうか。「読書について」の中で小説への幻滅が述べられた一節と、それに付された注を続けてみてみたい。

> On aurait tant voulu que le livre continuât, et, si c'était impossible, avoir d'autres renseignements sur tous ces personnages, apprendre maintenant quelque chose de leur vie, employer la nôtre à des choses qui ne fussent pas tout à fait étrangères à l'amour qu'ils nous avaient inspiré […], ne pas avoir aimé en vain, pour une heure, des êtres qui demain ne seraient plus qu'un nom sur une page oubliée, dans un livre sans rapport avec la vie[…].
>
> On peut l'essayer, par une sorte de détour, pour les livres qui ne sont pas d'imagination pure et où il y a un substratum historique. Balzac, par exemple, dont l'œuvre en quelque sorte impure est mêlée d'esprit et de réalité trop peu transformée, se prête parfois singulièrement à ce genre de lecture. Ou du moins il a trouvé le plus admirable de ces « lecteurs historiques » en M. Albert Sorel qui a écrit sur *Une Ténébreuse Affaire* et sur *L'Envers de l'Histoire Contemporaine* d'incomparables

essais.[3]

自由政治学院に在籍していた時分、アルベール・ソレルの外交史講座を受講した経験のあるプルーストは、歴史家がバルザックの小説を歴史学的アプローチで分析した論考を引き合いに出し[4]、バルザックを読む者は、作中にあらわれる歴史的事実に関心をむけることで「歴史的読者」となり、小説で物語れたことをただの夢として終わらせることを回避できるというのだ。小説の中に読み取れる歴史的事実の痕跡は、作品世界と現実とが無縁ではないことを示しており、ソレルのようにバルザックを土台にした歴史研究を行うことはつまり、小説の現実性を根拠にして、小説を読み終えて現実に戻った後もバルザックの世界の一部を生き続けることを可能にするというのがプルーストの主張である。およそ3年後に書かれたと「サント＝ブーヴとバルザック」においても、またもやソレルに言及しつつバルザックの歴史性が読者にどの

---

[3] Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve, précédé de Pastiches et Mélanges et suivi de Essais et articles*, édition établie par Pierre Clarac et Yves Sandre, Gallimard, Bibliotheque de la Pléiade, p. 171. 以下は、*C.S.B.*或は *P.M.*と略記し、巻数と項数のみ記す

[4] 件の論考は、ソレルが 1901 年 10 月 1 日に「ル・タン」紙で発表した G・ルノートル著『帝政時代におけるノルマンディーのふくろう党蜂起』に対する書評を指している。ソレルはこの論考の中でバルザックの『現代史の裏面』がいかに史実と密接につながっているかを分析しつつ、シャントリ夫人のモデル、コンブレ夫人の生涯について論じている。« Balzac avait séjourné en Basse-Normandie, au pays des chouans et des chauffeurs ; il avait recueuilli les récits romanesques de la duchesse d'Abrantès et reçu de son amie, Mme D… […] mainte confidance directe sur les gens et sur les choses. Il avait poussé plus loin, rassemblé, dépouillé plusieurs pièces du dossier de l'affaire de 1807. De ces éléments il a entendu composer non un drame historique, mais une étude morale, de l'humanité plus haute. […] Mme de Combray, l'authentique héroine de Tournebut, était riche, mariée à un homme riche et indolent qui lui abandonnait la direction du ménage et de la fortune. […] Cette Mme de Comray, dans Blazac, devient Mme de la Chanterie et se transfigure. »

ような効果をもたらすのか、語られる。

> […] quand l'intérêt du roman est épuisé, il recommence une vie nouvelle comme document d'historien. […] Peyrade, Felix de Vandenesse, bien d'autres ne nous semblaient pas très riches de vie. Albert Sorel va nous dire que c'est en eux qu'il faut étudier la police du Consulat ou la politique de la Restauration. […] au moment où il[un personnage de roman] va s'évanouir et n'être plus qu'un songe, […] Sorel nous dit : « Mais non, ce n'est pas un songe, […] c'est de la vérité, c'est de l'histoire. »[5]

バルザックを史料として読むことは、小説と現実との間に懸け橋をつなぐということであり、ロマネスクなるものは、現実世界に移されてもなお一定の意味を持ち続ける。しかし、プルースト自身も述べているように、バルザックの小説群が歴史小説としての機能を果たすのは、歴史的側面・現実的側面が作家の想像力や創意によって完全に虚構(フィクション)化されることなく、作品の中に不純物として混ざり込んでいるからだと言い換えることもできる。フィクションと史料の間を往来せざるを得ない歴史小説の本来的性格ゆえに、バルザックの作品はプルーストにとって、夢の世界と現実との混合物となっている。

> Cette réalité à mi-hauteur, trop chimérique pour la vie, trop terre à terre pour la littérature, fait que nous goûtons souvent dans sa littérature des plaisirs à peine différents de ceux que nous donne la vie. Ce n'est pas pure illusion quand Balzac, voulant citer de grands médecins, de grands artistes, citera pêle-mêle des noms réels et des personnages de ses livres, dira : « Il avait le génie des Claude Bernard, des Bichat, des Desplein […] ». […] Aussi continuerons-nous à ressentir et presque à satisfaire, en lisant Balzac, les passions dont la haute littérature doit nous guérir. Une soirée dans le grand monde décrite dans [ ][sic] y est dominée par la pensée de l'écrivain, notre mondanité y est purgée comme dirait Aristote ; dans Balzac, nous avons presque une satisfaction mondaine à y assister.[6]

---

[5] *C.S.B.*, p. 290.

[6] *C.S.B.*, p. 268.

実在の人物と架空の人物を混在させるのはバルザック的手法の一つであるが、そのおかげで、作品を読むことがそのまま歴史的事実を生き直すことに直結する。作中人物に同一化し、彼らの感情に共感することは、バルザックのみならずおよそあらゆる小説作品を読む際に起こる読者の心理状態であり、これは『キャピテーヌ・フラカス』を読む幼少期のジャン・サントゥイユにも当てはまることである。だが、バルザックを読むプルーストの場合は、作品世界への没入、作中人物への同一化が現実逃避のためとはならず、夢と現実の狭間、つまり、文学性を纏った現実を生きるための行為となる。バルザック的社交の世界がプルーストのような読者に快楽を与えるのは、非現実的な社交欲の満足を味わえるからではなく、それが実際に存在した世界、或は現に存在していて手の届きうる世界を写しているからなのだ。もちろんこのようなことが書けるのは、バルザックと同時代のものでは当然ないにせよ、実生活でも社交界に出入りし、若き日はスノッブとして揶揄されることも珍しくはなかったプルーストならではのことである。だからこそ、小説を読んでいながらも、現実を生きているような錯覚に快楽を見出し、反対に現実の社交界に身を置いた時には、バルザック的世界の雰囲気をそこへ投影しつつ愉悦を覚えるという、ある意味では倒錯した読書体験が成立するのであろう。従って、プルーストの独創性は、バルザックを歴史小説ととらえること自体にあるのではない。重要なのはむしろ、バルザックの中に歴史性を見出さなければならない動機と、読書の最中、そして読書後のプルーストの心理状態であろう。彼は、バルザックの歴史的側面を利用して、つまりは、バルザック的世界と実人生の様々な場面、例えば社交界の色々な場面とが類似しているという事実を利用して、バルザック的な要素を現実の中に嗅ぎ付けたいという欲求に突き動かされているのだ。そもそも、彼にとってバルザックが他の小説家と根本的に異なるのは、本を読み終えてしまえば決別しなければならないはずのロマネスクな世界を実人生においても再び生き直すことができるからなのであった。その意味で、アルベール・ソレルの行った歴史的読解をプルーストが評価したのは、バルザックを一種の史料として実証主義的な歴史研究に応用するソレルの手法に倣う意図からでは全くなく、あくまで小

説の中で体験したロマネスクな世界を一過性のもので終わらせずに、現実世界との相同性を根拠にして、小説作品そのものの真実性を確固たるものにしたかったからなのだ。

２　プルーストの歴史観からみるバルザックの小説技法

ところで、このような歴史的な事実とフィクションの間を行き来するようなバルザック読解の仕方は、歴史と文学の親和性を前提としており、プルーストの歴史観の特性に起因しているものと考えられる。実証主義的な歴史研究にはほとんど関心を示していないプルーストの歴史観とは一体どのようなものであったろうか。それをもっとも端的に示す一節が、「消え去ったアルベルチーヌ」の中のある場面にある。そこでは、ヴェネツィア旅行を終えてパリへと帰途につく汽車の中で、主人公と彼の母がそれぞれに宛てられた手紙を読み、彼らの知人・友人らの間に起きた出来事について語り合う場面である。特に二人の関心を惹いたのは、ジルベルトとサン＝ルーとの結婚、さらには、カンブルメール一家の息子、すなわちルグランダンの甥と、ジュピヤンの姪で嘗ては仕立て屋をしていたが、シャルリュスの養女となったためにゲルマント一族の家系に連なることとなったオロロン嬢との結婚を知らせる二通の手紙であった。語り手は、彼ら４人の、階級や身分、或は出身地の隔たりを乗り越えて結婚に至った数奇な運命を目の当たりにして、日常のどんなに些末な事件も歴史という大きな時間の流れのダイナミズムの中に位置づけられてゆくことを知る。

> Ainsi se déroulait […] une de ces causeries où la sagesse […] des familles, s’emparant de quelque événement, mort, fiançailles, héritage, ruine, et le glissant sous le verre grossissant de la mémoire, lui donne tout son relief, dissocie, recule et situe en perspective à différents points de l’espace et du temps […] les noms des décédés, les adresses successives, les origines de la famille […]. Cette sagesse-là n’est-elle pas inspirée par la Muse […] qui a recueilli tout ce que les Muses plus

hautes de la philosophie et de l'art ont rejeté, […] : c'est l'Histoire![7]

プルーストにとって歴史とは、人間だけでなくあらゆる物事に過去との関係を回復させ、それぞれが時間的な厚みをもった存在であることを確認させてくれるものなのだ。さらに歴史は、哲学や芸術に並ぶ「詩神」の一つであるとされていることに、プルーストの歴史観の本質を見て取ることができるだろう。上述したように、バルザック作品が孕む実証主義的歴史研究への応用の可能性を、敢えて文学作品の真実性へと昇華してしまうことができたのは、結局のところ、歴史が科学の領分ではなく、詩的創造の世界に属するものであると考えていたからに他ならないだろう。次の 1907 年にフィガロ紙に掲載され、「読書の日々」と題されたボワーニュ夫人『回想録』を論じた文章では、歴史は詩神の与るところであるという歴史観がより具体的に説明されている。

> mes premiers souvenirs de bal tenant d'un fil aux récits […] de mes parents […] rejoignent par un lien déjà presque immatérial les souvenirs que Mme de Boigne avait gardés […] : tout cela tissant une trame de frivolités, poétique pourtant, parce qu'elle finit en étoffe de songe, pont léger jeté du présent jusqu'à un passé déjà lointain, et qui unit, pour rendre plus vivante l'histoire, et presque historique la vie, la vie à l'histoire.[8]

歴史が詩的たりえるのは、現在からみればほとんど夢の世界に属する過去と現実が織り交ざって作られるからなのだ。夢は現在とつながることで絵空事ではなくなり、生命感と現実性とを獲得するのに対して、現在は過去と結びつくことで詩的な性格を帯びてゆく。この点で、プルーストのボワーニュ夫人『回想録』への関心は、バルザックの歴史小説を読むときのそれとまさに

---

[7] *C.S.B.*, pp. 253-254.

[8] Marcel Proust, À la recherche du temps perdu, édition établie sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, p. 532. 以下、*R.T.P.* と略記し、巻数と項数のみ記す。

一致していると言えよう。

以上のことから、プルーストがバルザック作品の中にみとめたものは、「歴史家の資料」としての価値、特定の時代の風俗や文物、時代精神などを再現する「博物館」としての価値だけではない。重要なのは、歴史が詩となり、歴史小説が、れっきとした芸術作品として成立しなければならないという点にある。

> Si l'impression de la vitalité du charlatan, de l'artiste, est accrue, c'est aux dépens de l'impression de vie de l'œuvre d'art. Œuvre d'art tout de même et qui, si elle s'adultère un peu de tous ces détails trop réels, de tout ce côté Musée Grévin, les tire à elle aussi, en fait un peu de l'art.[9]

芸術の純粋性と自立性とを侵しかねない歴史的真実の要素と、それだけでは作品世界の生命感やリアリティーを生み出し得ない芸術的要素との緊張関係のうちにバルザック作品の魅力が存するというのがプルーストの見方であるようだ。従って、そのような緊張関係の中で彼は、歴史考証の正確だけでなく、芸術作品としての側面をクローズアップすることもある。

> Sainte-Beuve a dit qu'il [Balzac] s'est jeté sur le XIXe siècle comme sur son sujet, que la société est femme, qu'elle voulait son peintre, qu'il l'a été […]. Or, Balzac ne s'est pas proposé cette simple peinture, au moins dans le simple sens de peintre de portraits fidèles. Ses livres résultaient de belles idees, d'idées de belles peintures si l'on veut, car il concevait souvent un art dans la forme d'un autre, mais alors d'un bel effet de peinture, d'une grande idée de peinture[10].

バルザックは、徹底した史料的裏付けによって 19 世紀フランス社会を活写したのではない。より重要なのは、「絵画的構想」、つまりは、一つ一つの場面をより独創的なものたらしめる描き方をすることである。印象派の画家モ

---

[9] *C.S.B.*, p. 290.

[10] *C.S.B.*, p. 276.

ネの名が挙げられていることからも、バルザックは現実を個人的印象や想像力の中に溶かし込んで描こうとする作家として捉えられている。ゆえに、歴史や現実という本来的には芸術の範疇には属さない要素を芸術の中に織り込んでゆくところにバルザックの天才はあるのである。

以上のようにプルーストのバルザック観には二面性がある。一方では、作品を不純なものにする危険を恐れず、それに現実性を与えるべく、実際の政治的・社会的事件に取材したり、「作中人物を、まるで実在の人間のように、それどころか、実在する著名な人間のようにして[11]」語ったりして、物語を極限まで現実と似通ったものにすることで、プルーストを含めた多くの読者をして、「空想と人間観察の面白さ[12]」を味わわせたバルザックの力量を強調している。他方では、「社交生活のほんの上っ面から採取されたもの[13]」を「高度な普遍性の高み[14]」にまで押し上げたり、一つ一つの台詞や仕草の裏に「バルザック以外誰一人描いて見せたことのない、きわめて特殊な心理[15]」がることを明らかにしつつ、様々な登場人物たちの一回きりの立場や状況の中にも「肉欲や喜怒哀楽にかかわる謎に満ちた法則[16]」を見出すバルザックの芸術的創造力のほうへと関心の軸を移したりもする。このようなプルーストの幅広い議論の仕方にこそ、「サント＝ブーヴとバルザック」を他の批評作品と同様の扱いをすることを許さない所以があるのだ。

３　レアリスムの陥穽と偶像崇拝的読書

これまで論じてきたように、歴史や現実、フィクションが入り混じったバルザック作品の特質によってプルーストは、小説で描かれた場面を現実の中に見出すことを求めていた。しかし、もっぱら史実との照合によってそれを

---

[11] *C.S.B.*, p. 289.
[12] *C.S.B.*, p. 279.
[13] *C.S.B.*, p .292.
[14] *C.S.B.*, p. 292.
[15] *C.S.B.*, p. 273.
[16] *C.S.B.*, p. 277.

行うソレル流の読解をプルーストがこころみた痕跡は存在しない。彼はむしろ、実人生の様々な場面に作品内で描かれた場面との類似点をみとめ、現実に投影されたバルザック的ロマネスクの世界に身をゆだることで満足する。例えば『カディニャン大公妃の秘密』について次のように述べている。

> Cette réalité selon la vie des romans de Balzac, fait qu'ils donnent pour nous une sorte de valeur littéraire à mille choses de la vie qui jusque-là nous paraissaient trop contingentes. […] par exemple, […] un homme qui a un vilain passé ou une mauvaise réputation politique […] et qui, dans un pays où il n'est pas connu, forme de douces amitiés, se voit entouré de relations agréables et pense que bientôt, quand ces gens vont demander qui il est, on va peut-être se détourner de lui, et cherche aux moyens de détourner l'orage. Dans les routes de cette villégiature qu'il va quitter et où bientôt peut-être de facheux renseignements sur lui vont parvenir, il promène solitaire une mélancolie inquiète mais qui n'est pas sans charmes, car il a lu *Les Secrets de la princesse de Cadignan*, il sait qu'il participle à une situation en quelque sorte littéraire et qui prend par là quelque beauté.[17]

それぞれ異なった境遇に置かれた読者も、身を潜めて生きるカディニャン大公妃の運命と自らを重ね合わせ、自分の人生がある瞬間に詩情に満たされているものであることを感じる。「ただの偶然の集まり」でしかなかった平坦な実人生も、作品の光に照らされることで高尚なものに思えてくるのだ。このような印象を読者に持たせるのも、作品の「濃厚な現実感」の効果である。限りなく現実に近い事柄が主題となっているがゆえに、実人生との類似性を発見しやすく、反対に現実の方は作品の持つ芸術的価値が付与される。さらにプルーストは、『カディニャン大公妃の秘密』に与えたこのような解釈を『失われた時』の中でも行うのだが、今度はシャルリュス男爵が読者として設定されている。

> Il[Charlus] tomba dans une songerie profonde, et comme se parlant à soi-même : «

---

[17] *C.S.B.*, pp. 276-277.

> *Les Secrets de la princesse de Cadignan* ! s'écria-t-il, quel chef-d'œuvre ! comme c'est profond, comme c'est douloureux, cette mauvaise réputation de Diane qui craint tant que l'homme qu'elle aime ne l'apprenne ! […] » M. de Charlus prononca ces mots avec une tristesse qu'on sentait pourtant qu'il ne trouvait pas sans charme. Certes M. de Charlus […] tremblait depuis quelque temps qu'une fois qu'il serait revenu à Paris et qu'on le verrait avec Morel, la famille de celui-ci n'intervînt et qu'ainsi son bohneur fut compromis. Cette événtualite ne lui était probablement apparue jusqu'ici que comme quelque chose de profondément désagréable et pénible. Mais le baron état fort artiste. Et maintenant que depuis un instatnt il confondait sa situation avec celle décrite par Balzac, il se réfugiait en quelque sorte dans la nouvelle […].[18]

シャルリュスは、作者を代弁する形で、憂いに満ちた自らの境遇をカディニャン大公妃と重ね合わせ、まるでバルザックの一場面に実際に身を置いているかのような錯覚に身をゆだることで、己の実人生に生じた文学的価値を慰みとするのである。しかしながら、このような現実とバルザック作品を同一視する読み方は、シャリュス男爵のモデルの一人でもあるロベール・ド・モンテスキウのバルザックへの偏愛ぶりを想起せざるを得ない。件のバルザック論の約 5 年前に書かれたとされるジョン・ラスキン『アミアンの聖書』の序文で、プルーストは、モンテスキウ伯爵を「高名な人」として名指しは避けつつ、彼のバルザックの読み方を偶像崇拝的であるとして批判していた。

> […] il[Robert de Montesquiou] reconnaît avec admiration […] dans la toilette d'une de ses amies : « la robe et la coiffure mêmes que portait la princesse de Cadignan le jour où elle vit d'Arthez pour la première fois. » En regardant […] la robe de la femme du monde, touché par la noblesse de son souvenir, il s'écrie : « C'est beau ! » non parce que l'étoffe est belle, mais parce qu'elle est l'étoffe […] décrite par Balzac[…].[19]

---

[18] *R.T.P.*, t. III, p. 445.

[19] *P.M.*, p. 135.

プルーストと偶像崇拝的芸術受容の関係は複雑であり、吉川一義の『プルーストにおける芸術の偶像崇拝』という論文の中で、プルーストの批判した、或は彼自身の中に潜む偶像崇拝の様々な類型が体系的に論じられている[20]。その中でも、上の一節で問題となるのは、芸術作品の中でしか存在意義を持ちえないものを、現実の中で、つまりは作品から切り離して崇めるというタイプの偶像崇拝である。ここでもまた『カディニャン大公妃の秘密』を例にとり、プルーストは、バルザックの創造物に他ならないドレスや飾り布といった事物との類似を根拠に、実際の衣服にまで美をみとめることの愚かさを告発し、芸術作品の自立性・独立性を主張している。芸術作品の中で描かれるもの全ては、その作品内でしか意味をもたないのだ。

しかし注目すべきは、この偶像崇拝批判は、「サント＝ブーヴとバルザック」の中で展開されている読書法にも見事に当てはまってしまうということだ。ドレスや飾り布といった事物と、作中人物の一生の特定の場面という違いはあるにせよ、作品との類似を根拠に、それとは本来何の関係もないものに当の作品と同等の芸術的価値を見出すことは明らかに、プルーストの言う偶像崇拝そのものと言うより他ない。従って、プルーストのバルザック論は、偶像崇拝批判を目的に書かれたのではないものの、文学と現実の等価性を盲目的に頼ることが偶像崇拝的読書に至りうる危険を暗にほのめかしているとも言える。そもそも作品の雰囲気を読後もなお現実の中で味わい続けたいという、プルーストがバルザックに対して抱いた関心の動機からして既に、偶像崇拝に陥る危険が潜んでいるのではなかっただろうか。

プルーストは、『アミアンの聖書』序文を読んでも明らかなように、このようなタイプの偶像崇拝のみならず、本来は美など宿っていないものに芸術的価値を認めて崇める行為全般を知的不誠実さの証であるとして、総じて偶像崇拝と名付けている。しかし、バルザック論の中で論じられる偶像崇拝は、そのような芸術至上主義的・審美主義的な不誠実の罪であると同時に、その

---

[20] Yoshikawa Kazuyoshi, « L'idolatrie artistique chez Proust », *Marcel Proust 6* : *Proust sans frontiers 1*, textes réunis par Bernard Brun, Masafumi Oguro et Kauyoshi Yoshikawa, Caen, Lettres moderne Minard, 2007, pp. 105-120.

根はさらに深く、芸術と現実の等質性を疑わず、作品は現実の鏡であると信ずるレアリスム信仰、および、作品と同等の詩情や美が現実にも存在しうるという物質主義的な美意識の一つの結果であるのだ。

確かにバルザックは、一般的にレアリスム文学の範疇にくくられることが多いからという以上に、プルーストの指摘した小説技法の効果から言ってレアリストであり、その意味で彼がレアリスムの陥穽に嵌った偶像崇拝的読書の例を挙げる際に執拗にバルザック作品、とりわけ『カディニャン大公妃の秘密』を取り上げているのは納得しやすい。しかし、プルーストの嗅ぎ付けたレアリスム信仰に基づく読書の危険は、バルザックに特有のものではない。例えば、プルーストの糾弾するレアリスム文学の代表格であるゴンクール兄弟の『日記』の中にも同じようなレアリスムの罠を見て取ることができる。ゴンクール兄弟の模作を挿入させつつ、レアリスム文学の不毛を暴くことを主眼にして書かれた断章の中で、主人公は、実際に会うと何の魅力も感じなかったヴェルデュランが『日記』の中では「絵画に関するすべての洗練、すべての美しきものの愛好家[21]」と評されているのを読み、自身の観察眼の欠如を嘆くと同時に、ふたたびヴェルデュラン邸を訪ね『日記』の世界を実際に体験したい欲望にかられる。ゴンクールの記述と、個人的な実体験との不一致から派生した主人公の考察はやがて、読書と実人生の関係という一般的な問題へと及んでゆく。

> […] j'aurais pu conclure […] que la vie apprend à rabaisser le prix de la lecture, nous montre que ce que l'écrivain nous vante ne valait pas grand chose ; mais je pouvais tout aussi bien en conclure que la lecture au contraire nous apprend à relever la valeur de la vie, valeur que nous n'avons pas su apprécier […].[22]

しかし、語り手は、読書によってはじめて理解できたヴェルデュランの魅力も、彼の観察眼の無さゆえに見過ごされていたわけではないことなど知って

---

[21] *R.T.P.*, t.IV, p. 287.

[22] *R.T.P.*, t.IV, p. 298.

おり、だとすれば、文学のほうが現実をゆがめ、嘘偽りを描いている可能性を疑わなければならなくなるだろう。

> […] que ces modèles médiocres que j'avais connus eussent […] inspiré, conseillé certains arrangements qui m'avaient enchanté, que la présence de tel d'entre eux dans les tableaux fût plus celle d'un modèle, mais d'un ami qu'on veut faire figurer dans ses toiles, c'était à se demander si tous les gens que nous regrettons de ne pas avoir connus parce que Balzac les peignait dans ses livres […], sur lesquels Sainte-Beuve ou Baudelaire firent leurs plus jolis vers […] ne m'eussent pas paru d'insignifiantes personnes, soit par une infirmité de ma nature, […] soit que'elles ne dissent leur prestige qu'à une magie illusoire de la littérature […].[23]

このように最終的にはゴンクールの『日記』のみならず、バルザック、サント＝ブーヴ、ボードレールにまで批判の矛先は及び、あらゆるジャンルの文学作品の真実性に疑義が呈されてしまっている。もちろんこの展開は、語り手が自身の小説美学を提出する前の準備段階として、スケープゴートとしてのレアリスムを批判するのみならず、文学の意義のそのものを問い直すという目的で設定されていることは確かだ。だがここで、この場面での主人公の読書方法がどのようなものであったか、思い起こさなければならない。『日記』に記されているヴェルデュラン邸で味わいうる知的快楽の魅力と、主人公の実体験との不一致から来る作品の真実性への疑いは、そもそも、現実と作品の間の照応関係を前提とした読みを行っているために生まれるものだ。作品の中にしか存在しえない「すべての美しきものの愛好家」ヴェルデュランに実際に会いたいと望むのは、偶像崇拝というより他ない。しかし、この断章では、現実と芸術の同一性を前提とするレアリスム信仰が生む結末は、バルザックの場合より深刻で、偶像崇拝に陥るだけでは済まされない。主人公は、読書の価値、さらにはボードレールなどの名も挙げられていることから、レアリスム文学のみならず、現実世界への指示機能を持たざるを得ない全ての文学の価値を低下させてしまう危険に直面せざるをえなくなる。文学

---

[23] *R.T.P.*, t.IV, pp. 300-301.

作品の中にしか存在しえない美を外界に求めてしまえば幻滅は避けられず、作品は現実とは縁のない嘘偽りにすぎなくなってしまうのは当然だ。『カディニャン大公妃の秘密』の例では、読者自身の実人生と作中人物との境遇の偶然の一致を意図せずに発見した上で、作品の詩情を現実に投影するので、読者の錯覚とはいえ、作品の真実性を再確認することは依然として可能である。しかし、ゴンクールにおいては、作品の真実性がみとめられるどころか、その空虚だけが浮き彫りとなってしまうのだ。

結語

以上のように、「サント＝ブーヴとバルザック」というバルザック論は、人間喜劇全体に共通するバルザックの小説技法を細部にわたって分析するなど、他の文芸批評と同様、対象作家の「真の自我」を明らかにするという目的も部分的には果たしているが、その全体像はむしろ、プルースト自身のバルザックへの偏愛ぶりを告白するとともに、偶像崇拝や現実と作品との混同といった悪癖を伴う読書法を一般化して論じ、そのような読書は文学作品そのものの価値にも傷をつけることを教えてくれるものであった。従って、このバルザック論の持つ射程はきわめて広く、作家が「ラスキン時代」以来持ち続けた偶像崇拝に対する批判的な見方や、偶像崇拝の根本要因であるレアリスム信仰・唯物論的美学の危険性、或は「見出された時」における実人生と文学との関係をめぐる問題意識の中で読み直されなければならない。プルーストは、サント＝ブーヴ論に収めた一連の批評作品を、ルモワーヌ事件を主題にした模作と同様、対象作家の特質を意識化し、彼らの影響から自己を解放するための浄化作業として位置付けているが、件のバルザック論の場合、「バルザックのように書く」ことを避けるためという目的のほかに、バルザックへの自身の偏愛ぶりに潜む悪癖を批判的に捉え直すという目的もあったのでないだろうか。或はまた、そのような読書法に抗うことによって、作品の美は作家によって創造されるべきものであり、それを外界に求めることは無益であるという非唯物論的・反レアリスト的な新たな小説美学の構築へと至ったのではあるまいか。